
改版：金髪なりし少年の想い～loss & intention ～

汀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

改版：金髪なりし少年の想いゝloss & intention
んゝ

【Nコード】

N5409A

【作者名】

汀

【あらすじ】

オリキャラ分多め、汀の『イロ者少年少女シリーズ』。現在大幅改稿中です。

序章 〽現在の状況〽（前書き）

オリジナル設定がかなり多い上、全てのシーンでオリキャラが登場します。

苦手な方はご注意ください。

序章 ー現在の状況ー

互いの存在を知るものは少なく。

だが確かに。

住む世界は違えど、そこで、息づく者たちへ……

すごく困る状況と言うのが、この世にはある。

テスト前日に風邪ひいたりとか、

ヘンな事を押し付けられたりとか。

それこそ、色々。

特に人の命が絡むと、凄い事になる。

俺の場合、悲しみもあつたけど……

それよりも、驚きと……困惑があつた。

俺は14歳になつたばかりで……1年ズレてるから、あと1ヶ月で中2になる。

俺は、母の妹、つまり叔母さんの家に居候し始め、同時にその養子になつた……のが、中1の夏。

そして今、中一の2月の終わり。

その叔母さん夫婦が……轢き逃げで、亡くなつた。

俺に、頼れる親戚は無い。
なぜなら。

俺の戸籍は偽造だから……

俺の本名は、シエル・チャーコリアル。

ヨーロッパ系ドラキュラの父と、日本人の母を持つハーフだ。

昔、俺の母親は父との結婚と同時に勘当され、だから最近まで、
一家全員ドラキュラの隠れ里で暮らしていた。

そして、俺が一人前のドラキュラだと認定されたのが去年の夏。

一人前のドラキュラは、オモテ社会で、ひとりで生きることがで
きる。

……というか、親から離れて暮らすことが、半分、義務のようにな
っている。

……とはいえ、この時代、十代前半の少年が、一人暮らしなんか
できるはずがない。

大抵が、オモテ社会で、親類のところで暮らすことになる。

俺の場合もそうだった。

母は、俺がオモテ社会で暮らすための受け入れ先に、唯一縁が切
れていなかった、自分の妹夫婦を頼ったのだ。

ちなみに、偽造戸籍に乗っている俺の名前は、はまぐちいたる浜口至。13歳。
それが、俺の偽名であり……俺は歳を1年誤魔化している。

序章 〽現在の状況〽（後書き）

〽作者より〽

金髪なりし少年の想いの改版、例によって大量に加筆しております。（汗）

（この序章では、隠れ里出身者が偽名で暮らす習慣など）
出来ればGW中に全て投稿できればいいんですが、果たして可能かどうか……

なお、改版ではタイトルを微妙に変更しています。

旧題：金髪なりし少年の想い〽loss & fixation〽
改版：金髪なりし少年の想い〽loss & intention〽
n 〽

旧題は『喪失と固定』の意味なのですが、改版では『喪失と意思』
、という意味です。このほうがいいと思ったので。

第1章〈悲しみの笛〉（オカリナの少年）

その音色は、周囲に響き渡っていた。
悲しみと共に……

（by 高木 渉）

2月26日（金曜日） 午後5時・シエルこと浜口至の場合。

葬儀場の隣が、小さな公園になっていた。

初めて会う母の親族に化け物に対する目で見られた俺は（いや、実際にドラキュラのハーフなのだが）

そこで、オカリナを吹いた。

ほんのわずかなスキ間の時間、夕日を浴びながら、ジャングルジムの上で。一心不乱に。

すると、ジャングルジムの下から拍手の音。

パチパチパチパチ……

おそらく長い間気付かずにいた俺と目が合い、開口一番にその人はこう言った。

「君も……悲しいんだね」

と。

それは哀れみでなく、共感の言葉。

誰なのか尋ねる前に、その人は警察手帳を俺に見せ、言った。

「僕の名前は高木渉、本庁の刑事です。

君は、浜口至君ですか？」

……話を聞くと、叔母さんの轢き逃げ事件担当になった刑事さんだった。

その少し前、高木渉の場合

轢き逃げ事件の被害者は、中年の夫婦だった。

子どもはいないが、去年の8月、親戚の少年を養子にしたらしい。
その少年の名は、浜口至。2月20日生まれ。

13歳で、杯戸中学の1年生。

利善町の葬儀場に行ってみるとその少年はおらず、代わりに被害者夫婦の親戚がいた。

なぜかえらく冷たい親戚の方々。

仕方なく自分で捜していると、澄んだメロディが流れていた。

もしかやと思つて調べてみると、公園で……

正確には、公園のジャングルジムの上で、学ランの少年がオカリ

ナを吹いていた。

夕日をバツクに、赤く染まっている周囲。

とても綺麗な……だけど悲しい、どこか懐かしいメロディが、哀愁を帯びていて……

気がついたとき、僕は近づいて、こう言っていた。

「君も……悲しいんだね」

と。

我に返ってあわてて確認してみると、やはり学ランの少年は至君だった。

二言ばかり言葉を交わし、ふと思う。

本来ならば交通課が担当するはずの轢き逃げ事件を、わけあって捜査一課が担当している。

……そのわけを至君が知った時、彼はどう反応するだろうか？

第1章〈悲しみの笛〉（オカリナの少年）（後書き）

〈作者より〉

旧版を読んでくれた友人から、「浜口君は金髪なの？」と質問されたことがあります。

詳しい設定は後で出すつもりなのですが、少なくともこの時点で、高木刑事が向き合っている学ランの浜口君は、黒髪です。

第1章〈悲しみの笛〉（真実の記憶・上）

正月に里帰りした時、警察で働いている兄が、こう言った。

『自分がドラキュラであることをおおっぴらにして、オモテ社会で暮らすのは無理だ。

ドラキュラの存在そのものが、大部分の人間にとっては悪でしかない。

我々がオモテ社会で暮らすならば……正体を隠して人間として暮らし、その上で自分の場所を見つけるしかない』

悟ったような兄さんの口調。

そうかも知れない。と、俺は思った。

人間にとって、『定期的に人間の血を吸わねば生きていけぬ存在』は、化け物でしかないのだろう。

ハーフである俺も兄も、人間の血がないと生きていけない。

おおっぴらになれば、排斥されて当然で……

間違いなく、人間の人種差別よりも根が深い、難しい問題になる。

しかも俺達は自分の身体を色々といじくりまわされる事が嫌いだから……

なおさら、ヴァンパイアと同じように、人間と離れた場所で、『ドラキュラの隠れ里』を作ることを望んだ。

……ただ。

と、オカリナを吹きながら俺は考えていた。

母さんの親戚が大勢いるこの状況下、葬儀場にいる親戚の方々は俺を明らかに嫌悪している。

今後こういう環境で『自分の場所』を作ることは……

果たして、可能だろうか、と。

(by シエルこと浜口至)

2月26日(金曜日) 午後5時1分・シエルこと浜口至の場合。

「轢き逃げ事件担当のおまわ……じゃなかった、制服じゃなくて背広だから、刑事さんですね。

……お世話になります」

ジャングルジムを降り、オカリナをポケットに突っ込んで……軽く会釈。

高木さんも俺に会釈を返す。

「もう一度確認するけど、浜口、至君、だよな？」

僕は高木渉。

君は浜口誠さんと乃梨子さん夫婦の息子さん……」

「……息子って言っても、去年の8月の下旬に養子になったばかりなんですけどね。

なんで、半年ちよつとで、突然こんな風に養い親が死ぬんでしょうね……」

うつむきながら、乾いた口調で言っていることを自覚する。

「……大丈夫？ 浜口君」

「大丈夫です。」

外国で暮らしている実の親にも連絡しました。

……飛行機が無くて、3月1日に日本に到着するそうで。

その上で、これからどうするか決めます。……親戚と一緒に」

「……そうなんだ」

泣いてはいない俺の顔に安心したのだろう。

高木さんは、ややほっとした顔で相づちを打った。

当然、実際は違う。

そもそも隠れ里は日本にあるし、母さんは飛行機で来たりしない。
わざと遅れてくるだけ。

事情を知らぬ一部の親戚に対し、『外国で暮らしている』事のつ
じつま合わせの……嘘だ。

おそらく俺をどうするか協議は、ものすごい話し合いになる。
だが、先ほど見た親戚の方々の視線。

少なくとも母さんが来るまで、葬儀場に、俺の居場所はない。

それを考えると、ため息が出そうだが……

ほかにもある、もう一つの疑問というか心配というか……

「高木さん、今、悲しいんですか？」

「え？」

突然の問いに、高木さんは俺を見つめた。

……チャンス！

そんな感情を表情に出さず、俺はじっと目を見つめる。

……記憶を読むのは、俺の十八番だ。

『捜査一課の刑事だ』と、さっき高木さんは言った。

俺は最近読んだ小説で知っている。

いくらなんでも、轢き逃げは交通課の担当のはずだ。

もし、特別な事情があるのならば、俺が被害者の遺族である以上、知る権利はある。

高木さんが轢き逃げ現場をモロに見ているのかは疑問だが……
それでも、養い親の最期を知りたいと思う。

……刹那。

俺の瞳を見つめたまま動かぬ高木さんの記憶が、俺の頭にフラッシュバックした……

第1章〈悲しみの笛〉（真実の記憶・上）（後書き）

〈作者より〉

この節、サブタイトルを変更しました。

旧題：第1章〈悲しみの笛〉（少年の場所）

改版：第1章〈悲しみの笛〉（真実の記憶・上）

だから次の節の題は、『真実の記憶・下』となります。

旧版を読んだかたはご存知と思いますが、話の内容が対になっています。

第1章　悲しみの笛　（真実の記憶・下）

……その犯人は周りにいた人たちを突き飛ばし、物凄い勢いで駆け出した。

止まりなさい、と叫ぶあの人の声。

だが間に合わず、犯人はあの人の車に乗り込み、走り始め。
大きな音を残して、その場から逃げ出す。

僕達もパトカーに乗り、追いかけてようとした刹那……

幾つもの悲鳴が、その場を満たす。

駐車場から50メートルもない場所にある交差点で、大量の血を流している2人の人間。

その上にある、車が通った跡を見た途端、

身体中の、血の気が引いた……

（by 高木渉）

2月26日（金曜日）　午後5時4分・高木渉の場合。

「……さん、高木さん！」

僕は、ハッと我に帰った。

目の前に立って僕の名を呼ぶ心配そうな顔の、少年の名は。

「浜口君……どうかしたの？」

「分からないんですか？ 高木さん、震え始めたんですよ……
それこそ……ケイレンみたいに」

「け……痙攣？」

「ええ。ケイレンとしか例えようがないですよ。ものすごく震えて
いました。」

「……大丈夫ですか？」

心配そうな浜口君の問い。

大丈夫じゃないかも……というセリフを飲み込み、無理矢理笑顔
を作る。

「大丈夫……だと思う」

「そうですか……。ところで高木さん」

真剣な、浜口君の顔。

「轢き逃げ事件で、どういう状況で、俺の養い親が死んだのか……
教えてくれませんか？」

誰に聞いても、教えてくれないんです」

「えっ……？」

笑顔がひきつるのを、僕は自覚した。

あわててセリフをつくろう前に、浜口君は悲しい笑顔で言い放つ。

「俺は、小説読むの趣味で……」

好きな小説に、強盗の犯人が車で逃走中に、通行人の夫婦をはね

てしまうシーンがあつて、

……ありえない話だけど、もしかしたら実際にそういうことだったりしたら、かつこいい以前に……
悲しいでしょ？」

「……！」

表情だけでなく、身体中が硬直した。

……ありえないわけではない。

実際に、浜口君の両親は、そういう事件の被害者になった。

殺人事件の犯人が、周りの人を突き飛ばし、キーが付いたままの……

佐藤刑事のアンフィニを奪い、通りがかりの夫婦である浜口君の両親を轢いて、逃走。

犯人はいまだ捕まらず、逃げている。

そのことを説明するために、この葬儀場に來たのだから……

同刻・シエルこと浜口至の場合。

ドラキュラの心理操作の一つに、人間の記憶を読む、という術がある。

その術は俺の十八番だが……
それでも術が上手くいくかどうかは、使った人間の体質に影響さ

れる。

大体5割の人間はあっさり記憶が読め、残り4割はまったく読めず。

残りの1割は、ほんのわずかにしか記憶が読めず、しかも術に敏感に反応してしまう人間。

でも、意識を失いかけた上、震える……ほどの露骨な反応は、珍しい。

「高木さん、高木さん！」

俺はあわてて名前を呼んだ。
はっとし、反応を返す高木さん。

「浜口君……どうかしたの？」

「分からないんですか？ 高木さん、震え始めたんですよ……
それこそ……ケイレンみたいに」

「け……痙攣？」

「ええ。ケイレンとしか例えようがないですよ。ものすごく震えていました。」

「……大丈夫ですか？」

自分で言いながら、馬鹿馬鹿しいな、と、思う。

この人、俺が見た記憶が自分の中でフラッシュバックし、そのショックが身体に出ただけだ。

「大丈夫……だと思う」

「そうですか……。ところで高木さん」

体質の割にはつきりと見えた記憶は、音声も、そのとき高木さんが考えた思考も、ちゃんと付いていた。

……それでも信じたくなくて、カマをかけてみる。

「轢き逃げ事件で、という状況で、俺の養い親が死んだのか……
教えてくれませんか？

誰に聞いても、教えてくれないんです」

「えっ……？」

表情が固まっている高木さん。

……次のセリフで高木さんが更に固まれば、その記憶は真実だ。
微笑もうとして失敗し、それでも……告げる。

「俺は、小説読むの趣味で……

好きな小説に、強盗の犯人が車で逃走中に、通行人の夫婦をはね
てしまうシーンがあつて、

……ありえない話だけど、もしかしたら実際にそういうことだ
つたりしたら、かつこいい以前に……

悲しいでしょ？」

「……！」

……結論。

真実の記憶だ。

第1章〈悲しみの笛〉（真実の記憶・下）（後書き）

〈作者より〉

浜口君の一人称が「僕」になっていた旧版のミス修正。（浜口君の一人称は、「俺」です）

あと、高木刑事の、術に対するリアクションを書き換えました。旧版のままでは、さすがにマズイと思ったので。（旧版では、「白目剥いてケイレン」になっていた）

それとは別に、ストーリーのことなのですが……

佐藤刑事のファンの方々に怒られそうな『事情』です。

しかし、交通課ではなく捜査一課が関わる『事情』となると、こんな話しか思い浮かびませんでした……。 （汗）

第1章〈悲しみの笛〉（役立たずの刑事・上）

やたらと重苦しい沈黙の後、気を取り直した高木刑事は、今後の予定を告げた。

どうやら俺は、警視庁に行かねばならないらしい。

養父母の轢き逃げ事件について、俺に説明しなければならない事項があるようだ。

わざわざ警視庁で説明しなければならないほど、重要な事項なのだろう。

もつとも、それがどういう事項なのか……

高木刑事の記憶を覗いた時に、予想は出来ているのだけど。

2月26日（金曜日） 午後5時30分・シエルこと浜口至の場合。

えらくボロい高木刑事の車に乗せられ、葬儀場から約三十分。都内の結構立派な場所に、立派な建物がある。それが、警視庁だ。

俺と一緒にしてきたのは、俺の母と、死んだ乃梨子叔母さんの、父親。

つまり、俺の母方の祖父だ。

車の中は、それぞれの立場のせいで、少しばかりピリピリとした空気。

高木刑事も、俺も、俺の祖父も、乗車した皆が、無言だった。

警視庁に到着すると、高木刑事と、千葉と名乗ったぼつちやり体型の男性刑事に誘導された。

興味を押さえきれずに、キョロキョロと周囲を見ながら歩く。
やがて祖父と別々になり、小さな、会議室のような部屋に案内された。

まず目に入ったのは、部屋の中央にある、長方形型の大きな机。
そして、机の右側の、3脚のパイプ椅子（既に2人座っている）。
机の左側には、誰も座っていない、パイプ椅子が1脚ある。

と、机の右側の椅子に座っていた2人が、こちらを見て会釈した。

無言で、小さく、手と視線を動かす。

左側の椅子に座って下さいと、そういう意味のようだ。

同刻・高木渉の場合。

浜口君は、ゆっくりと椅子に座った。

「……」

既に椅子に座っていた、白鳥警部・目暮警部の2人と、目が合っ

たのдарう。

彼は小さく会釈。

僕がパイプ椅子に座ったのを確認し、目暮警部は小さく咳払いした。

ピンと張り詰めた、少し重苦しい雰囲気。

……と、浜口君が口を開いた。

「俺の、養父母の轢き逃げ事件について、説明する事項があるそうですけど……」

俺の祖父も……別室で、説明を受けているんですか？」

「……」

白鳥警部と目暮警部がちらりと目配せし、そして白鳥警部が言う。

「君の、お祖父さんは……君と一緒に、説明を受けたほうが良かったかな？」

浜口君は、少し慌てて言った。

「……いえ、むしろ別々の方が嬉しいです。」

俺の、実の母親の事とか……。

結構、複雑な事情があるから。

俺、ほかの親戚と一緒にいると、気まずい雰囲気になるんです」

「そうか……」

目暮警部は嘆息する。

今から、告げなければいけないのだ。

浜口君にとって、とてもつらいはずの、真実。

すなわち。

……轢き逃げ事件の、真相を。

第1章〈悲しみの笛〉（役立たずの刑事・上）（後書き）

〈作者より〉

旧版掲載時に間違えていたサブタイ、今回の掲載で修正しました。
なぜシエルが警視庁に招かれたのか、それは後になって説明される予定です。

私の通う高校が定期テストのため、投稿はテスト終了の5月17日までお休みさせていただきます。

第1章　悲しみの笛（役立たずの刑事・下）

警視庁で、俺一人を相手にした、説明が始まる。

俺の祖父も別室で、同じ内容の説明を受けているのだろう。

俺の祖父は、俺の養父母がいつ頃に死んだことをどう思うのだろうか？

もしも、この轢き逃げ事件をいい気味だと思っているのなら、絶対に許せない。

自分の膝の上、俺は自分の拳を握りしめ、強く、そう思う。

（by 浜口 至）

2月26日（金曜日）午後5時39分・シエルこと浜口至の場合。

説明の内容は、思った通りのものだった。

今日の朝、杯戸町で殺人事件が発生した。

事件の被疑者（『容疑者』という呼び方は、マスコミ用語だそうだ）は、すぐに判明する。

が、殺人容疑で捕まえようとしたとき、その被疑者は突然、走り出した。

被疑者は制止を振り切り、周りの人々を突き飛ばし……

なんと、その場に居合わせた刑事の車を奪い、駐車場から逃げ出す。

そして交差点を曲がる途中で、横断歩道を歩いていた俺の養父母をはねて、逃げた。

いまだに、その被疑者は見つかっていない。

ちなみに被疑者は、自分自身の免許証を現場に落としている。

しかし、その免許証は偽造されたものだ、あとになって判明した。

免許証に載っていた名前も住所もデタラメで、顔と性別以外の手がかりが全く無い。

……以上が、目暮と名乗った人（階級は警部と言っていた）の、説明。

……長い説明が終わったあと、俺は小さく嘆息した。

膝の上で握りしめた拳はうつすらと汗ばんでいて、そして小さく震えている。

そして……俺の声も、少しだけ震えて、疲労の色を帯びていた。

「制止できなかったんですか？」

その殺人者が逃げ出すのを、誰も止められなかったんですか？」

「……」

ただ俺の目の前で目を伏せる、三人の私服刑事。

彼らは何も言わなくて、だから俺の声が大きくなる。

「その殺人犯は、刑事さんの車を奪って、逃げたんでしょう？
奪われた車の持ち主は、どんな刑事さんなんですか？

殺人犯はそのまま逃げ出したんだから、車のキーを抜かずに停車
していたんですね？」

と、そこで目暮さんが言った。

「車の持ち主は……警視庁に勤めている、捜査一課の女性刑事です。
本来はこの事件の担当ではなく、他の事件の捜査の帰りに、殺人
事件の応援に呼ばれ、

そして……先ほど説明した事態になりました」

感情が高ぶる。

怒り、悲しみ、全てをぶちまけるように……

俺は、怒鳴った。

「俺は、去年の夏に乃梨子叔母さんたちの養子になって、まだ半年
ぐらいしか過ぎていないんですよ！？」

俺には、外国で暮らしている親がいるからまだ幸運だった。

……でもひよっとすると、孤児になっていたかも知れないんです
よ？」「

涙混じりの、自分の声。

「犯罪者を捕まえるのは、警察の仕事でしょう！？
それが出来ないのなら……」

俺が言うのは、相手をなじる、そのための言葉。

押さえつけていた感情が、一気に噴きあがる。

「それが出来ないのなら、単なる役立たずでしかない！
……違いますか？」

目の前に座る三人は、ただずっと、唇をかみしめている。

2月26日（金曜日）午後5時45分・高木渉の場合。

浜口君の声が、部屋中に響く。

……確かに、浜口君の言っていることは、まったくの正論。

犯罪者を逮捕するのは警察の仕事。

それが出来ないのは大きな失態だし、自分たちが役立たずだとい
う……一番の証明だ。

この捜査一課の仕事で、一步間違えると取り返しのつかない事態
になるのは、皆、知っている事実。

そして何より……

その場にいながら何も出来なかった、役立たずの刑事だった僕自
身にも。

浜口君が怒って、当然だ……

第1章〈悲しみの笛〉（役立たずの刑事・下）（後書き）

〈作者より〉

本日中間テストより復帰しました。汀です。

この節で、この作品の旧版からのコピペは完了しました。

これを投稿後、管理人さんに旧版の削除をお願いすることになると思います。

次の更新は、『黒髪少女の終末記』の改版と、『水色少女の物語』の次話投稿後になる予定です。

第1章　悲しみの笛（全焼の家・上）

怒鳴った後の火照りと硬直する空を感じつつ、俺は静かに目の前の刑事達を見つめていた。

どこまでも気まずい雰囲気のまま時間が過ぎていった、その時。他の刑事が突然やって来て、その場の皆にとんでもない報告をした。

俺の家、浜口家が、火事だ……という知らせを。

（by 浜口 至）

2月26日（金曜日）午後6時20分・高木渉の場合。

「結構な勢いで燃えてますね、俺の家……」

浜口君は、停車した僕の車の後部座席で、そう呟いた。

燃える家の周囲、車がそれほど近付けるはずがない。

消防車や野次馬の人からは結構な距離があるけれど、ここは逆に騒然とした雰囲気逆に良く分かる位置だ。

「浜口君、車から降りると、もう少し……」

見物している人と同じぐらいのところまで近付けるけど、どうする？」

「あー……」

ここでもいいです。

近付くとススが飛んできそうだから。
でも、窓を開けてもらえませんか？」

僕は無言で、後部の窓を開けた。

更に浜口君は言う。

「鎮火するまでどのくらいかかるか、分かりますか？」

「……イヤ、分からない。」

でも、完全な鎮火までは、結構、時間がかかると思う」

それなりに離れた位置であつても、強く燃え盛っているのが一目瞭然の家。

おそらく、結果的には……全焼、だろう。

「何と言つか、……何かの陰謀みたいに次々と不幸が起こってますね。」

養い親の次は、家ですよ……？」

浜口君は、力無く笑った。

第1章〈悲しみの笛〉（全焼の家・上） （後書き）

〈作者より〉

前回の予告を思いっきり裏切り、久しぶりの更新となりました。

（申し訳ありません）

お久しぶりです、汀です。

新連載やら何やらで、結果的に2ヶ月以上連載がストップしてしまいました。

取りあえず今週中に全焼の家・下と黒髪少女、（出来れば水色少女も）、隔週連載作の更新と進めばいいなあ、と思っではいるのですが。

浜口家の火事の原因は、当然、後で出てきます。

第1章 悲しみの笛（全焼の家・下）

車から見えるのは、燃え盛る自宅。

短い間ではあるけれど、俺がこれまで住んでいた家。

浜口家は、今まさに、炎によって失われつつあった。

（by 浜口 至）

2月26日（金曜日）午後6時20分・シエルこと浜口至の場
合。

「結構な勢いで燃えてますね、俺の家……」

俺はその現場を見て思わず、そう呟いた。

やはり規制やら何やらがあるのだろう、この車が現場にあまり近寄ることは出来ない。

だけど逆に騒々しいのが一目瞭然で、結構いろんなことが分かりやすかったりする。

「浜口君、車から降りると、もう少し……」

見物している人と同じぐらいのところまで近付けろけど、どうする？」

気遣う、高木刑事の言葉。

でも俺は火や灰がダメなんだよな、ドラキュラだから。

俺達ドラキュラに限った話ではない。

たいていの『人ではない者達』、……特に夜や闇に生きる者は、強い明かりや火を苦手とする。

「あー……」

ここでいいです。

近付くとススが飛んできそうだから。
でも、窓を開けてもらえませんか？」

多分この距離なら、俺自信の身体に、火による直接的な被害は無いだろう。

見るだけなら害は無い。

……何時間もこの場にいるのではない限り。

「鎮火するまでどのくらいかかるか、分かりますか？」

「……イヤ、分からない。

でも、完全な鎮火までは、結構、時間がかかると思う」

確かに、そうだろう。

完璧に、俺の家は燃え尽きてしまうだろう。

火は、かなり盛大に燃えている。

では、……なぜ俺の家は燃えている？

「何と言つか、……何かの陰謀みたいに次々と不幸が起こってますね。」

養い親の次は、家ですよ……？」

考えて、思わず笑いが出た。

火事の原因は、たぶん放火だ。

俺の養い親が死んだのは、偶発的なものだろう。

記憶を覗き見た結果、それは間違いないと思う。

そして、……おそらくそのことを知った親戚の誰かが、この家に火をつけた。

理由は単純、『バケモノ』である俺が、この家を相続せずにすむように、だ。

浜口誠と乃梨子、俺の養い親が2人とも死んでしまった以上、この家は俺が継ぐべき遺産となる。

死んでしまったこの夫婦に実の子供は無く、代わりに、ただ一人養子の俺がいるだけだからだ。

そして、ドラキュラの血を引く俺が財産を持つことを、良く思わないヤツがいる。

そいつは、葬儀場で俺にやたら冷たかった親戚達の中の……誰かだろう。

第1章〈悲しみの笛〉（全焼の家・下）（後書き）

〈作者より〉

ようやく投稿となりました、全焼の家・下、です。

やたら冷たい親戚達の中、浜口君がどういう選択をするのか、見
ていただければと思います。

……しかし最近、立て続けに火事のシーンを書いているような
気がします。（笑）

以下、業務連絡です。

黒髪少女の終末記は、木曜か金曜の投稿予定。

その次が水色少女です。

お待たせしてばかりで申し訳ありません……。

追記：すいません、コピペの確認ミスです。

冒頭が『高木渉の場合』になっていたミス、修正しました。

第1章　悲しみの笛（泊まる家・上）

自宅の火事をしばらく見た後、俺と高木刑事は葬儀場に戻った。やたら冷たい親戚達がいる場所で、しかし俺と親しい者も、1名だけが葬儀場を訪れていた。

クラシナミコウ

倉科命刻、18歳。

本名、サラ・リッテルザール。

俺の遠縁であり、俺の兄の婚約者でもある高校3年生。もちろん、俺と同じく、ドラキュラと人間の混血だ。
(by 浜口 至)

2月26日（金曜日）午後6時40分・シエルこと浜口至の場
合。

「るーくんも大変だったね、こんなことになるなんて」

「うん」

この人が俺を「るーくん」と呼ぶのは、簡単な理由による。イタルとシエル、俺の偽名と本名の両方に、「る」の字が入っているからだ。

「……でも、命刻 義姉^{ねえ}さんも大変じゃないの？
今、大学受験の時期で、……勉強は？」

「ん、……大丈夫。

外国語短大の推薦入試に受かったから。
受験からはもう解放されているのよ、私はね」

「じゃあ義姉さん、4月から短大生なんだ」

「うん、そゆこと」

命刻義姉さんは頷いた。

俺や、俺の兄とは正反対の性格のこの人、微笑んだ顔は結構能天気だ。

「そつえばさ、るーくん。
今夜、ウチに泊まる？」

「……えっ？」

急な話題轉換。

「泊まるってったって、……俺が泊まって大丈夫なの？」

確かこの人、俺と同様に親戚の家で生活しているはずだ。

「大丈夫。

ウチは中学生1人なら泊める余裕はあるし、私の養母^{かあ}さんも、るーくんの事情を知ってるから」

義姉さんの顔から笑みが消えた。

手のひらを頭の後ろに組み、茶髪のおさげ髪が揺れ、周囲の親戚を見渡す。

そして鋭く、ただ一言。

「亡くなった2人のお葬式、取り仕切るのは誰？」

「俺の祖父。」

つまり、乃梨子叔母さんと母さん姉妹の父親」

「亡くなった養父おいさんの親戚は、関かんわらないの？」

「関かんわるんだろうけど、今はまだ来てない。」

親戚の人は愛知に住んで、あと……30分ぐらいしたら東京に着きくらしいね」

確か高木刑事が来る1時間くらい前、そう連絡があった。

「お通夜はいつ？」

「明日、夜。」

お葬式は明後日だそうで」

「喪主はるーくんだよね？」

「うん」

そりゃそうだ。

一応養子とはいえ、俺は亡くなった夫婦の、ただひとりの息子。

「お通夜やお葬式がまだなのに、何で親戚がこんなに来てるんだろ
うね？」

「通夜や葬式の前に、色々打ち合わせをしたいからじゃないの？」

「……打ち合わせだけかなあ？
親戚の人がここに来た目的って……」

「いや、たぶん違う」

俺は言った。

「この機に乗じて、色々俺と話したい人もいるみたいだね。
例えば……遺産の話とか」

第1章〈悲しみの節〉（泊まる家・上） （後書き）

〈作者より〉

こんにちは、汀です。

水色少女の物語に一度だけ（第1章最終節で）出て来た女性、命刻。

ようやく登場となりました。

ちなみに文中、命刻が『姉さん』でなく『義姉さん』なのは、主人公の実際の姉でなく、主人公の兄の婚約者だからです。

次節、『泊まる家・下』、今週中に投稿予定です。

ところで先日、これまでの作品の改稿を行いました。

ルビ機能が追加されて書き直したいと思った所、分かりにくい所など、一通り直しておきました。

話そのものが変わるわけではありませんので、念のため。

第1章　悲しみの笛（泊まる家・中）

自宅が燃えた時に分かったこと。

人間ではない者の血を引く俺を、嫌悪する人間がいる事実。
なぜ嫌われるのか知った上で、俺は訊く。

「みくねえ命刻義姉さん、俺の親戚達が反対すると思う？
俺が義姉さんの家に泊まること……」

義姉さんは黙って首を横に振る。

「反対しないと思う。十中八九」

俺の家に放火した者の正体は、分からない。
だが放火犯であろうとなかろうと、バケモノである俺を、家に泊
めたがる親戚のかたは少ないはずだ。

……遺産をめぐる下心があるなら、話は別だが。

俺は考えを巡らせ、顔を上げた。

今晚俺が泊まる家について、ちょっとだけ良い考えが浮かんだか
らだ。

（by シエルこと浜口至）

2月26日（金曜日）午後6時48分・高木渉の場合。

これ以上葬儀場にいても、僕には何も出来る事は無い。

だから警視庁に帰ろうとしたら、葬儀場の廊下で、帝丹高校の制服姿の女の子に呼び止められた。

「あの、すみません。」

浜口乃梨子さんと誠さんの轢き逃げ事件で、ここに来ていた刑事さんですよね？」

焦った様子で僕を確認するその女の子。

僕は頷いた。

「ええ、そうですけど……」

「すみません、殴り合いのケンカの仲裁をしてもらえませんか？」

「えっ？」

ケンカ、……誰が？」

「至くんと親戚の人が。」

……周りが取り押さえようとしても、止まらないんです。

先に手を出したのが親戚の人だから、なおさらタチが悪くて……」

僕は廊下を振り返る。

ケンカが繰り広げられている場所は、どこなのだろう？

「警察は、家族間や親戚間の争いいさかには、基本的には関わられません」

僕の言葉に、女の子は頷いた。

「知ってます。」

確か、……『民事不介入の原則』って言うんですね、それでも暴力沙汰のケンカの仲裁は、可能じゃないんですか？」

と、突然。

10メートルほど向こうの控え室から、慌てた感じの男の人が飛び出てきた。

直後、ガラスが割れる音や、罵声や、さらには至くんの叫び声らしきものも聞こえるようになる。

確かに、どう見ても仲裁が必要な状況だ。

「他の親戚のかたは、仲裁が出来ないんですか？」

「……無理です、おそらく」

だとしたら結局、僕が至君をなだめるしかないのだろう。

僕はこの女の子と共に、控え室に向かった。

2月26日（金曜日）午後6時50分・シエルこと浜口至の場合。

要は、親戚の人を怒らせて暴力沙汰にした後、俺が反撃出来ればそれで良い。

では怒らせるためにはどうすればいいか。

それは、……遺産関連の話をしたあとで相手を遠回しに馬鹿にすれば、それで済む。

おそらく相手が先に手を出し、俺はそれに殴り返す。

その間、義姉さんが仲裁出来るよその人間、……葬儀場の職員な

どを呼んで来る。

そしてケンカが仲裁された後、俺は宣言する計画だった。

『遺産の話でこんな殴り合いになるとは思わなかった。』

母方の親戚の家に泊まるのは怖いから、俺は今晚、父方の親戚である命刻義姉さんの家に泊まる』

と。

こうなると、親戚達はこの意見に賛成するしかなく、しかも俺に遺産の話は出来ない。

案の定、俺が反撃するところまでは上手くいった。

しばらくして、命刻義姉さんが仲裁出来る人間を連れて、控え室に飛び込んでくる。

だが、その人間が高木さんだとは思わなかった。

「あ、刑事さん！」

俺は手を止めて言い、殴り合っていた親戚が思わずつんのめる。

服が乱れたりグラスコップが割れたりしている状況下、俺の言葉で、一瞬で部屋はシンとなった。

注目された高木さんは部屋の状態を見、固まり、数瞬後に我に帰って一言。

「あー、……大丈夫ですか？」

親戚の人が仲裁出来ない殴り合いを止めて欲しい……って、僕は頼まれて来たんですが」

俺は答える。

「大丈夫です、たぶん。
見ての通り、……刑事さんが来て、
雰囲気^がが凍りつきましたから」

第1章〈悲しみの笛〉（泊まる家・中）（後書き）

〈作者より〉

こんにちは。

学校が休みになり、久々の昼間の投稿です。

これを書いてて思ったのは、

「こういう状況下、警察が来たと聞いてケンカが止まる程度には、
親戚は冷静だったんだ……」

ということ。

本当に頭に血が上っているのなら、警察が介入しようとしても、
気付かずにケンカを続けると思うので。

次節は投稿までに結構時間がかかると思います。

第1章 悲しみの笛（泊まる家・下）

敵意も恐怖も興奮も、一瞬で硬直してしまった控え室の中、フツ目の前を見ると、

先ほどまで元気に殴り合っていた親戚の唇からは血が出ていた。

……口じゃなく、唇からの出血なのが救いだが。

2月26日（金曜日）午後6時52分・シエルこと浜口至の場合。

「高木さん、もう帰られるんですね？」

俺は視線を変えずに答え、高木刑事は我に帰った。

「あ、……はい」

あまりに衝撃を受けたのか、俺に対する口調が微妙に変わっている。

確かに、これはタメ口で話せる状況じゃない。

「命刻義姉^{みこくねえ}さんが刑事さんと呼んだんですか？」

「あー、そうだけどもねん。

警察の人呼ぶの、マズかった？

とりあえず仲裁が要ると思って呼んだんだけど……」

親戚のかたがたが、義姉さんを睨みつけた。

だがまあ、義姉さんのこの行動は正しい。
俺が義姉さんに頼んだのは『仲裁できる人間』であり、『刑事を
呼ぶな』とは一言も言っていないからだ。

「少しもマズくないです、義姉さん。」

「……ところで今日、義姉さんの家に泊めて欲しいんですが」

「へ？ ……何で？」

「見ての通り、俺は母方の親戚のかたと仲が良いわけじゃないです。
父方の親戚、あなたの家のほうが安心できます」

控え室の中、当の母方の親戚の前で俺は言い切った。

同刻・高木渉の場合。

「高木さん、もう帰られるんですよね？」

浜口君が、突然そう質問した。

「あ、……はい」

「命刻義姉^{みくねえ}さんが刑事さんと呼んだんですか？」

僕の横、帝丹高校の制服を着た女の子が、これには答える。

「あー、そうだけどこめん。」

警察の人呼ぶの、マズかった？

とりあえず仲裁が要ると思って呼んだんだけど……」

……いや、マズくはないだろう。

浜口君の制服はすごい状況だし、親戚の人も唇が切れている。

「少しもマズくないです、義姉さん。

ところで今日、義姉さんの家に泊めて欲しいんですが」

「へ？ ……何で？」

「見ての通り、俺は母方の親戚のかたと仲が良いわけじゃないです。父方の親戚、あなたの家のほうが安心できます」

……すごい事言っなあ、この子。

第1章〈悲しみの筈〉（泊まる家・下）（後書き）

〈作者より〉

ご迷惑をおかけしております、汀です。

掲示板に書き込んだ通り、現在執筆中です。

本当に久々の投稿となりました。

これからどれだけ続くが分かりませんが、どうかよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5409a/>

改版：金髪なりし少年の想い～loss & intention～

2010年10月10日01時04分発行